

日本文化研究会会報の案内

一号 「いい加減にしろ」 — 「鴨川改修計画」 批判

生田耕作著

二号 「洛中洛外雑詠抄」 — 木水彌三郎翁追悼号

生田耕作編著

三号 「風景は文化なり」

— 鴨川東岸「花の回廊」整備計画批判

生田耕作著

※バックナンバーご希望の方は左記へご連絡下さい。

日本文化研究会 連絡先

京都市北区鷹峰北鷹峰町三〇一 奢瀨都館内

〒603-8468 電話 〇七五(四九三) 六五六七

一九九八年九月三十日発行

表紙・権林寺永観堂真景「花洛名所図会」より

頒価 300 円

「日本文化研究会」会報 四号

江戸のボードレール

柏木如亭を偲ぶ

如亭墓碑復興記念



如亭の漢詩

新稲法子

新稲法子です。お招き下さってありがとうございます。しばらくお話させていただきます。

先ほど坂井さんから柏木如亭の伝記的なことから、どうして如亭という江戸生まれの詩人が京都で一生を終え、ここ永観堂に葬られているのかということについてはお話がありましたので、私は、ではその如亭という詩人はどのような作品を残したのか、ということをお話しようと思います。如亭の漢詩をまだお読みになっていない方のために、いくつか取り上げますので、この詩人の作品の魅力を知っていただきたいと思います。

また、この会に私をお招き下さったのは、失われていた墓石を見つけた時のことについていろいろ話をしろということだと理解しております。ただ見つけたというだけで、ドラマチックな何かがあるわけでもないのですが、お墓が再興される今日、あの時の感動をお分けできたらと思います。その

縁仏かどうか問い合わせる札が掛かっていたので、重い気持ちで大阪に帰ってまいりました。見つけて以来、十一年の間で一番不安な、なにか胸騒ぎするような気持ちで過ごしていたんです。ですから、この春、日本文化研究会のかたがたのお力によって、修復されたと聞いて、どんなに、ほっとし、また嬉しがつたかわかりません。

こういうわけで、墓石が埋もれているのを見つけてから、ものぐさな私が出たことといえは、毎年お盆にお参りして、なにやかやお供えしていたくらいです。如亭は大変な食通でしたが、荔枝を食べたかったらしいんです。『詩本草』という本に、「余毎に書を読みて荔枝の二字に逢はば即ち口涎を流す」、中国の書物を読んでいて、この荔枝が出ているとよだれが出てくる、と書いているんです。今なら中国から飛行機で輸入されていて、ライチーといつて中華料理のデザートに出てきますので、お食べになったことのあるかたも多いと思います。江戸時代ですから、夢の果物なんです。残念なことにお盆の時期には生のものが出回ってないんですね。ですから缶詰置いといたりしました。そのころは今のようにならんとお墓になってなかったわけで、「この頃この辺に変わった物置いたあるなあ」と思われてたかも知れません。

この荔枝のことを書いてある『詩本草』という本は、如亭が自分の漢詩に文章を付けた、非常に面白い本なんです。永

ことを交えて、お話することにいたします。

失われたものとされていた如亭の墓石があったことは、もう十一年も前なのですが、黒川洋一先生が岩波の『文学』という雑誌の、昭和六十二年五月号に「柏木如亭の墓」という文章をお書きになって、知られるようになりました。その原稿のコピーをいただいて、今も大切に持っているのですが、ここに出てくる、先生に柏木如亭の墓石を見つけたと手紙に書いた「ある女子学生」が私だったというわけです。『文学』に載る以前、前の年の秋から、いろいろな人にお知らせして、無惨な状態の写真もあちこち配ったりしたのですが、お墓をどうかしようという話はなかなか持ち上がりませんでした。このことをきっかけに私はもっと研究がしたくなって大学院に進んだのですが、一介の大学院生が「これは有名な詩人の墓やから」といってお寺さんと交渉してもだめやろうと思っ

て、初めから諦めていたんです。その後はオーバードクターでかつかつの生活をしておりますので、はずかしながら、もし交渉して、修復出来たとしても、今お墓というのは本当に不足していて高価なものですから、そんな費用はどうてい出せないと思いきんでいたんです。

それでも、このお墓のことはずっと気にかかっておりました。特に、この前のお盆にお詣りした時など、近いうち大々的な墓地の整理があるらしく、あちこちの古い墓に対して無

井荷風はその日記『断腸亭日乗』の大正十四年五月八日にこれを「江戸詩人詩話中の白眉」と絶賛しています。京都に關係するものを一つ取り上げましょう。まず、

京寓還来便当家 京寓還り来つて便ち家に當つ

嵐山鴨水旧生涯 嵐山鴨水の旧生涯

老夫不是求官者 老夫 是れ官を求むる者ならず

祗愛平安城外花 祗だ愛す平安城外の花

という七言絶句があります。これは『如亭山人遺藁』の第一巻にも「京城の寓所に還る」と題して収められています。それが、「老夫 是れ官を求むる者ならず」、自分は官職などという世俗的な幸せを求めているのではない、「祗だ愛す平安城外の花」、京都の郊外の花を愛するだけだ、というんですね。城というのは、昔の中国風に表現したわけで、京都の町なかを取り囲んで花の名所があちこちにあるのを、こう詠んだんです。『詩本草』には、これにこんな文章が付いています。長いので端折りながら読んでいきましよう……

平安は万世の帝都にして、城中の熱鬧、市井の諠譁、物として有らざる無く、事として有らざる無し。

京の都は、熱気があつてにぎやかで、ありとあらゆるものが揃っている、と言うんですね。そのなかで、

独り飲膳に于いて粗一二を識る。此れ以て言ふ可き已。

如亭はこの京都の、食べ物に関して一言、言わせてくれと言うんです。

夫れ祇園の田楽豆腐・加茂の閉羹菜・北山の松茸・東寺の芋魁・錦巷の肉糕・桂川の香魚は兒童も亦其の佳を知る。金鯉・銀鯉・絳鮠・黄鮠の美鮠は近く琵琶湖中に取り、棘鱗・比目・方頭・大口の名鮠は遠く若狭海浜自り輸す。水菜・蕪菁・腐皮・麩筋の妙選、昆布・櫻子・鯛魚・海鰻の精製、僕を更へて数へ難し。

「僕」は、役人のことで、役人を交代させても教え尽くせないほどだと、『礼記』の故事を踏まえて、京都の名物をずらずら取り上げているんですね。もちろん、『礼記』の場合は儒学の質疑で、食べ物のことではありません。それで、その中でも、

若し夫れ酒樓の品は茶碗蒸を以て第一と為す。茶碗蒸は

いものを詠んだ詩がたくさん残っているのですが、この、京の茶碗蒸し対江戸の蒲焼きの結論を出した漢詩文は、まだ見たことがありません。如亭ほど、むさぼること、この「饑」という漢字ですね、これに徹した詩人は、他にいないようです。

『詩本草』は、現在『太平詩文』という雑誌に注が連載されています。



柏木如亭筆「山水図」 土井聳牙賛（坂井輝久蔵）

鶯を以て第一と為す。到る処、復た敵する者無し。

といって京都の茶碗蒸しを誉めています。そのあと、故郷、江戸の蒲焼きをこれに引き合わせて、

鶯は、江戸、平安に及ばず。鱈は、平安、江戸に及ばず。吾今、特に二者を以て断じて東西勁敵と為す。

と言う。あひるの茶碗蒸しとうなぎの蒲焼き、このライバルは果たしてどちらがおいしいか、如亭は、

味を知るの真なる者に非ざれば、蓋し言ひ難き也。姑く之を書して、以て両都に遊ぶことの久しくして老饑余に同じき者を竣つ。

なんて書いて締めくくっているんです。「老饑」の「饑」という字、これは「むさぼる」という意味ですけども、如亭はよく自分のことをこの字で表していて、また友人たちも如亭を語るときにこの漢字を用いています。

如亭ほど徹底してはいなくても、江戸時代も後半になると漢詩人たちは潤筆のために地方を巡るということをしたのです。それで、それぞれの土地で出会った珍しいもの、おいし

こんなふうにな面白本で、『詩本草』や如亭の詩集を大学時代、もう夢中で読んでいます。話の関係上、しばらく私ごとになりませんがお許し下さい。今から十二年前、私は大阪大学の国文科の学生でした。江戸時代、大阪には町人たちが作った儒学の学校がいくつかあって、その中でも有名なものに懐徳堂かいとくどうというのがあるのですが、その膨大な蔵書が、大阪大学に引き継がれていて、図書館で比較的気軽に見られるんです。そんな下地のあるところへ、中国文学の、杜甫の研究で知られる黒川洋一先生が、当時いらっしゃって、日本の漢詩についていろいろご発言なさったので、大阪大学というところは、よそと比べると国文学で漢詩文をする人が多いという傾向があるんです。

私も、黒川先生の授業に出ていたのですが、授業中、「日本の、江戸時代の漢詩は面白い、誰か国文で取り上げる者はいないだろうか、もしいたら一緒にテキストを読んであげるのだが」とおっしゃったんです。これを聞いて、卒業論文に何をするか迷っていた私は、漢詩をやってみようと思ったのです。ちょうど『頼山陽とその時代』という著書もある中村真一郎氏の『江戸漢詩』が、岩波書店の「古典を読む」シリーズで出たところで、これが非常に新鮮で面白かったので。

中村真一郎氏の『江戸漢詩』より早く、富士川英郎氏も

『江戸後期の詩人たち』という本を書いておられますが、黒

川先生から、こういうものを読んで、詩人を誰か一人選びな

さいと言われ、私が候補に上げたのが、柏木如亭でした。

実を言うと、先生は最初如亭を読むのを嫌がられたのです。

その素行がよろしくないというのです。多分、儒学者然と

した真面目な詩人を御希望だったんじゃないかと思えます。

如亭の人となりについては先ほどお話を聞いたところですが、黒川先生は「京都で、のたれ死にするような詩人はやめなさい」とおっしゃったんです。でも私は逆にその生き方に魅力を感じ、他の詩人は考えられませんでしたので、結局如亭を読んでもらうことになりました。

「鶯」というのは「紙鷲」、凧のことなんです。日の当たると暖かい南側ののきで、一日中うつらうつらしていたけれども、なんだか子供たちがやかましかった。庭を見ると破れた凧が落ちていて、これが原因だったのか、という詩です。どうもこの人は、昼間眠っている詩や夜更かししている詩が多いんですが、これも、そういう、物憂い一日を詠んでいます。

読み始めると、柏木如亭という人はその素行に反して詩を作ることに關しては品行方正なんです。非常に神経の行き届いた作品ばかりで、頼山陽もこのひとは一目置いているし、梁川星巖も如亭を慕っている。先生も、これはなかなかの詩人だということで、あまり非難なさらなくなりました。

如亭の属した江湖詩社は、それまで大流行していた『唐詩選』風の詩を否定して、南宋の詩を紹介して自分たちも何気ない日常生活を詠んだんです。如亭と同時代の江湖詩社の詩人たちは、その後、文化文政の時代になって詩壇の中心的存在になっていきます。如亭は江戸を離れて、そういうことにはかかわらず、独自に漢詩を詠んで一生を終えるのですけれども、詩風の面でも同じ江湖詩社の詩人たちと如亭は異なっておりまして。この『木工集』の次の詩集、二冊目なのに『如亭山人藁初集』というんですが、ここに載せた分を残し

て、作品を焼いてしまってます。宋詩風の詩風を捨てて、唐詩に還る、というんです。

「枕上雨を聴く」です。

しかし、如亭の唐詩風は、それまでの唐詩風とは全く違っています。『唐詩選』風の、ロマンチックで雄大な題材と言葉で、日本の詩人が詠んだ漢詩は、現実とのバランスが取れていないものだから、どこか安っぽくなってしまってますね。如亭は、こういう詩風に退化したのではなく、結局、漢詩という文学形態が一番熟しているのが唐詩だ、と改めて認識したのだと思います。友人の葛西因是という儒者の意見に従ったということですが、この因是の著した『通俗唐詩解』という本があります。これは、漢詩を学ぼうという者に向けたテキストといったもので、詩論を窺うことは出来ません。

さてこうして柏木如亭を読み始めたのですが、私たちより先に、もうこの詩人に注目して研究されている方がいました。現在成蹊大学で教鞭を取ってらっしゃる梶斐高氏で、非常に詳しく調べられた『柏木如亭年譜』を作っておられました。それを読んでみると、永観堂の墓石が既に失われて今はない、とあったんです。現存していた頃の写真も、このように載っていました。

如亭に心酔していた梁川星巖も唐詩風に従った一人ですが、そうはしなかった江湖詩社の詩人たち、大窪詩仏や菊池五山は、その日常生活の全てが詩になるような作風です。詩仏や五山は、その時代の人々に好まれて、流行の詩人となつていき、出世もするんですが、如亭に比べると緊張感のないだらだらした作品が、膨大に残されています。

これをみて、ただ素朴に、墓石というものはそう簡単になくなるのかなあと思つたんです。それでとりあえず永観堂に行ってみることにしました。如亭の子孫に当たる方が、もう

『如亭山人藁初集』からも、二首選んできました。先に挙

げるのは「枕上雨を聴く」です。

雨久茅簷百感生

雨久しふして茅簷百感生す

蕭疎枕上夜三更

蕭疎たる枕上夜三更

独行曾作秋蓬客

独行曾つて秋蓬の客と作りしに

滴碎郷心是此声

郷心を滴碎せしは是れ此の声

わからなくなっているようなので——もしかしたら、どうか、妻子のいた江戸だけでなく、如亭の滞在していたあちらこちらに、縁の方がいらっしやるような気もするのですが……この機会に見つかればと願っております——最初、頭の中には、無縁仏として積み上げられているというイメージがあったんです。大きさが写真ではわからないので、もつと小さいと思ひこんでいたんですね。東京の日暮里の養福寺というところに如亭の碑があるというお話でしたが、私も見に行きました。それは両手で抱えられるくらいの小さい物なんです。小さい墓石なら、無縁仏になつて積み上げられているのではないか、でもこの形なら、積み上げる場合、下の方には入れにくいだろうから、きつと表面にあつて見られるだろうと思つたんです。

墓地の中であんまりうろろしていて不審に思われてもなんでしょう、お寺の方に声を懸けて、これこれこういう人のお墓があつたはずなのですが、と言いました。やっぱり解らないということ、好きなようにお捜し下さい、と言われましました。

ですが、最初来たときは見つけれませんでした。いろいろな可能性を考えて混乱してきましたので、とりあえず大阪に帰りました。

もう一度来てみて、登つたところに山辺雲居の大きい碑が

の前で料理を食べ、ここ永観堂にもきつと何度も来たんやと胸がいっぱいになりました。

『如亭山人墓初集』には、「書懷」という七言絶句があります。其の一は、

客路風霜兩鬢枯
故園幽徑定荒蕪
不知身後長埋骨
何處山阿又海隅

客路の風霜兩鬢枯る
故園の幽徑定めて荒蕪せん
知らず身後長く骨を埋むるは
何れの處の山阿又海隅

と、死後、自分の骨を埋める場所は、どこの山の隅か海のほとりだろうというのです。さらつと詠んだ、なんでもないような詩ですが、お墓に彫られた、「如亭山人埋骨處」という語に通じる句を含んでいます。如亭の有名な「新瀉」という七言律詩も「道ふこと莫かれ三年一咲に留まると 此の間何ぞ恨まん骨長く埋むるを」と「埋骨」という言葉が出てきますが、友人たちはこういつた作品から「如亭山人埋骨處」という言葉を取つたのかも知れません。

揖斐先生が如亭について非常に詳しく調べられ、こんな分厚い伝記になさつたことと比べると、私がお墓を見つけたことくらい、本当に何でもないとだと思ひます。でも、今はこの世にいない人を偲ぶよすがになるのは、やっぱりお墓な

ありますけれども、記録によるとそのそばにあつたはずなんです。結局また前回と同じ狭い範囲をうろろして、ふと、前来た時踏んでいた石の真ん中が、土が少しかぶさつてわかりにくかつたんですが、不自然に、人工的に、まあるく穴があいているのに気がついたので。そこで、揖斐先生の年譜の写真を見ると、お墓の下の部分の石のかたちに似ている。しかも、この石は、今はきれいに修復されていますけれども、手前が持ち上がつて崖の方に少し傾いていたんです。そして、もしかして、この崖に倒れて埋もれているのかもしれないではないですか。

まさか土を掘るようなものは持つてきませんでした。お香は持つてましたけど。ですが、やっぱりかなり大きい石が埋まつていたんです。とてもじゃないけど全部を掘り起こせませんでした。土を払うと「如亭山人埋骨處」という文字が出てきました。

この時の感動は忘れられません。わーっ、という感動ではなくて、ぼーっとしてしまいました。それまで、黒川先生と読んでいた柏木如亭という詩人は、私の中では、たとえて言えば白黒の写真のような存在だったんですね。それが、この瞬間に、鮮やかなカラーの、動く映像に切り替わったんです。本当にこの人はかつてこの世にいたんやというのが、はつきりと感じとれたんです。京都に住んで、祇園で遊び、南禅寺

なんです。だからこうして私のような者を今日呼んでいただいたんだと思ひます。

柏木如亭の人生は、今もし聞けたとすれば本人は楽しかつたと強がるだろうと思ひますが、世間的にみてあまり幸せとはいえない、むしろ悲惨な面もあつたと言えます。切ない望郷の念を詠んだものとして、『如亭山人遺集』では、「首夏、山中病起」という七言律詩があります。

山窓風日患纒除
試趁清和出寓居
細響林間流水遠
残香辭上落花余
無人作伴從尋句
有杖扶行不待興
忽憶江城此時節
庄街新樹売松魚

山窓の風日患ひ纒かに除く
試みに清和を趁ひて寓居を出づ
細響林間流水遠く
残香辭上落花余る
人の伴を作す無し句を尋ぬるに従せ
杖の行くを扶くる有り興を待たず
忽ち憶ふ江城此の時節
街を庄する新樹 松魚を売るを

「江城」とは江戸のことで、遠く隔たった故郷、江戸を切なく懐かしんでいるのですが、「忽ち憶ふ江城此の時節 街を庄する新樹 松魚を売るを」と、鯉が出てくるところがこの人らしい。鯉が今まさに売られているだろうとふるさとと、鯉のような魚に大金をはたいた、若い日のどちらも、死を間近

にした如亭には、懐かしいものだったでしょう。

ですが、如亭は、死んだ後永観堂にこのような立派なお墓を作って葬ってくれる友人達にも恵まれ、残った作品を上梓してくれる梁川星巖という弟子にも恵まれました。今日また、はるか時代を隔ててその作品に感動し、墓石を再興しようという日本文化研究会の方たちという読者にも恵まれたということを考えて、そういう面では非常に幸せな人だと思いません。

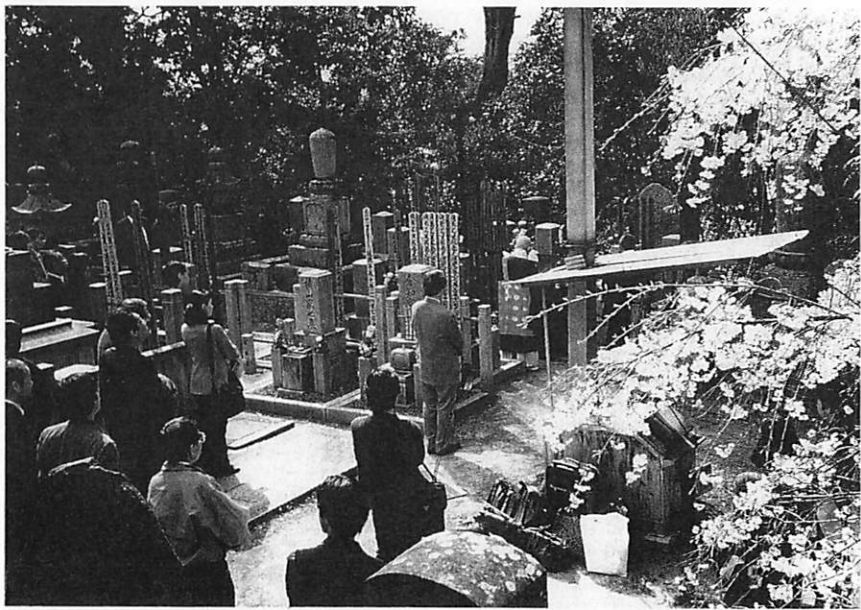
しかし、これでめでたしとお開きにしてしまうのはちょっと残念な気もします。というのも、如亭の他に、それこそ無縁仏にされてしまった文人たちのお墓が、あちこちにあるからで、一方で墓地のスペースが、京都や大阪といった町では非常に貴重なものになっているという現実もあるわけです。今回、如亭の場合、幸運にも、放置するに忍びないという人々が現れたわけですが、こころある人たちに、無縁仏があるたび、いつもいつもご負担いただくというのはやはり限界がありましようから、あるいはもう手遅れのものもあるでしょうが、何か対策を考えなければいけない時にきています。と思います。これをきっかけとして、歴史的に貴重な人物の場合、無縁となったお墓を、今回同様に文化遺産として大切に保存していくような機運が高まるようお願いしまして、本日のお話の結びとさせていただきます。

研究会活動報告

京都より

平成八年二月下旬、主宰生田耕作先生の物故により久しく中断していた研究会を改めて開催する。初回のテキストには、生田先生の敬愛された漢詩人、中島棕隠の『金帯集』より、時節がら梅花景勝の地、月ヶ瀬を題にした七律八首を採る。この八首は津の画家宮崎青谷が描いた月ヶ瀬の図に、請われるまま詠んだ詩であるが、月ヶ瀬へは足を踏み入れたことなく、当初は再三にわたり作詩を辞退した旨、棕隠自ら断っている。しかし、未踏の地であるがゆえに、想像力をほしいままにし、画題の遙かに及ばぬ詩境を切り開くところに棕隠の面目がある。縦横無尽に故事古典を引く豊かな学識ときらびやかな語彙、そこにみなぎる自信には、会員一同敬服するばかりであった。月ヶ瀬の地の景勝を天下に知らしめる端緒となった当時のベストセラー、斎藤拙堂著「月瀬記勝」「梅谿遊記」よりその抜粋を併読する。

五月の連休は東京の会員と合同で、棕隠の編になる狂詩集『天保佳話』より、武朝保こと平塚飄齋著「嵐山花見行」



再興した「如亭山人埋骨處」墓碑の開眼法要

を輪読する。森銑三氏はその著「平塚飄齋の研究」で、これを花見の実景と取り、そののどかな趣きを佳としているが、これでは狂詩としての面白味を欠く。表題からして「あらしやば（嵐山）」初体験「花見行」女郎買いとといった裏の意味を下敷きにしている。ことほどさように、全文隠語尽しの（だまし文）。一幅の画とも思える駘蕩たる春の日の花見の実景を詠む裏で、奇態百出際物づくめの性風俗を盛りこむのだから手が込んでいいる。（東京からの報告も参照下さい）

今日の貧弱な隠語辞典の類いでは調べのつかない隠語の多さにいささか手を焼きつつも、江戸漢詩人の遊び心の一端に触れる思いをした後は、棕隠と並び生田先生の愛された詩人、柏木如亭の『詩本草』より「吉原詞」をテキストに選ぶ。詩の品格、字句の冴え等、日本漢詩の傑作に留まらず、ポエジーとしての純度においては、如亭が傾倒した唐の名詩に比しても遜色がない。ヴァレリーは言う、詩作品に完成はないと。どの時点でよしとするかは、作り手の資質と良心の問題なのであろう。後半生を旅の空に明かしながら「吉原詞」の詩句の彫琢をやめなかった如亭こそは、完成という魔に取り憑かれた詩人であった。時同じく「吉原詞」を評釈する東京の会員とも意見交換を行う。

引き続き如亭の朋友、菊池五山の「水東竹枝詞」、如亭の師、市河寛齋の「北里歌」等、吉原や深川などの花街を詠ん